

Cid Corman の自然について

—その俳句的なもの—

矢口以文

1. 序

Cid Corman はいま活躍している中堅所のアメリカ詩人である。¹⁾彼はユダヤ系であり、²⁾現在日本に滞在中である。最近、京都で出版された彼の詩集、*in good time* は、彼がかって *Combustion, Origin, Poetry, San Francisco Review, Le Journal des Poètes, Inland, Midwest, Outcry, The Outsider, Saturday Review, Nomad, Matter, The Resuscitator, The Nation, The Plumed Horn* 等に発表したものなどを含めて編んだものだ。この詩集の中に、かなりの数の日本に主題をおいた詩が掲載されている。この論文の目的はこれらの日本に関する諸詩の中の自然と人間のイメージをまず追求し、後半ではそれを俳句との関連において考察する。

2. 自然のイメージ

Corman の詩に描写されている日本の自然はまず宏大である。機械文明に汚されぬ一点のくもりもない澄み切った存在である。高村智恵子が東京に見できなかった自然がある。

And then the fields will empty.
The chaff ashes yield yet a
little smoke, as if to say

Here they were, the mortals, they
tried. How incredible the
Sky is! Our blue our blue eyes. (from KYOTO)

この風景によれば、自然はまた恩恵と安らぎとを与える存在である。したがって、それは同時に平和そのものなのである。自然は決して恐るべき存在ではない。たとえ、嵐があったとしても、それは本来の姿ではない。すぐにおだやかな、平和な、自然の姿に戻るのである。

Yesterday the river run red
they were dyeing up river

Today it is all sky again
gathering rock and children (from KYOTO)

自然はまた静寂な存在としてとらえられている。

The rock is
Agamemnon.

A dun leaf
hangs in that scale. (from KYOTO)

石の静けさの支配するこの閑寂の庭は、古代の心に連らなるものである。ここでは時は静止している。

自然は生命を静かに躍動させている。この詩の後半は次のような image である。

Be the
anonymous
pine shivering
steadfastly.

そして、また自然は永遠に連らなるものとしても描かれている。次の詩は茶をたてている僧侶を描いているが、その緑の野の中にあるさびた茶室に、永遠を暗示する空が入ってくる。

Through the light-thatched roof
the sky gets in and
at the edges more. (from KYOTO)

このように、Corman の詩の中に描かれている日本の自然は、機械文明に犯されていない、自然本来の姿の自然である。偉大であり、宏大であり、平和であり、恵みと平安を与えるものであり、静寂そのものであり、永遠に通じるものであり、生命であり、のどかで優しい。

3. 文明と人間

しかし自然はそのような存在ではあっても、人々は、必ずしも自然ではない。人々は文明社会の中に住んでいる。だから彼らはこの文明に害され、人間本来の自然の姿を失いつつある。そんな人間の姿は彼は次のように描く。

We sit on the grass,
eat rice-cakes and watch
others go into

the temple to see
the old treasures, to
reassure themselves

they did not, as we
apparently ourselves
have, come for nothing. (from KYOTO)

この“others”はいそがしすぎて、寺院の宝物をゆっくり鑑賞もできない。そこには人間本来の姿は失なわれている。一つでも見逃したら損だと数だけぐるぐるまわるこの連中の俗物性を、彼は静かな口調に皮肉っている。

THIS CREATURE は酒場の女給を描いたものだが、彼女の不自然性は明らかである。

lips painted heavily
over a shapeless mouth
eyes reviewing
her callused hands

and the path beyond
the small bar's gate
as if some lover
were bound to appear there.

この田舎芸者的な化粧をした女給は二十世紀の商業主義的、俗物的文明の犠牲者である。彼女は金のために、自分の自然を売っている。

同じように、詩 PACHINKO は、都会のパチンコ文明を、皮肉とユーモアをもって描いている。自然のない都会の中で、孤独な人々のつかれたようにパチンコに打ち興じている姿は、不自然そのものである。

O patient denizens of plate-glass alley
shake down the silver moon skilfully
into the slots of your eyes (PACHINKO)

4. 自然と人間

この非人間的な社会の中にあっては、誰でもがそれに犯されざるを得ない。人々はいわゆる現代病である neurosis に多かれ少なかれかかっている。Corman は“Everyone has his touch of neurosis”³⁾と断言する。しかし彼はそこからの脱出を求めるのである。だから彼が neurotic な image を作る

とき、必ずといっていいくらい、自然の姿の image を対置させている。例えば、寺院の宝物をせかせか見てまわる人たちに対して、ゆったり、なにもものにも思わされずに古典的な自然の雰囲気をしたのしむ自然な“私たち”の姿がある。

また、彼はこの neurosis 患者を救いようのないものとしては 描いていない。彼は、本当の病人はノイローゼに住みついている人たちのことであるという⁴⁾。誰でもノイローゼにかかっているが、そこから脱出を試みなければいけない。そしてそのことは可能なのである。THIS CREATURE の中の、ごてごて化粧した不自然な女給も、自然（本来の女性）をとりもどすのだ。この詩の後半はそれを暗示する。

suddenly when she asks
and finds we dont
want anyone else but her
for ourselves

her hands and eyes
come to our care
and more than the caged
crinoline doll above her

or the calendared geisha
selling beer
for a moment is
what she always was

a woman (italics mine)

“自然な”要求をした“僕ら”の故に、彼女は本来の自然な“女性”をとりもどすのだ。

このように Corman は、自然に即した人間の生き方を人間性に合った生き方だと暗示する。それならノイローゼにかかった人間はどのようにして回復するのだろうか。彼はその回復への道を本来的には自然の中に見出しているのだ。だから、彼が自然な姿の人間を描くときは、必ず自然の背景の中にとらえられている。同じように、彼の描く自然には必ず人間がいる。

次の詩は老人と孫との関係を描いている。

The old man in kimono

bent a little as though to
be able to hold better

his grandson's hand this morning
leads the child along the stream
among the rice-fields. The sun

is plucked here and there at points
to provide their quietness
bouquet. They see together. (from KYOTO)

この平和な自然の中の二人の関係は信頼関係である。そこにはほのぼのと
した愛情がある。二人の間に平和がある。そこには、あのせかせか宝物をみ
てまわる人たちの中には見出せないなにかがある。

自然の脈搏と一つになるとき、人々も自然である、と彼は暗示する。次の
詩は農村のイメージだが、そこにはなごやかな、のんびりとした、自然のリ
ズムにしたがって生きる農民の姿がある。そして、“私”も自然と一つにな
って歩いている。

I walk miles out
into the western foothills ;

through the small fields
past the long racks of soiled rice

pint-sized women
in ankle-bound pants hoeing

men ladling muck
from shoulder-cradled buckets

a few children
nestling high up in a stack

a young couple
feeding sheaves to a machine

by the roadside
grain smoothed out on straw sacking

surprisingly

not lifted by a quick wind. (THE HOLIDAY)

そして、自然と一つになったとき、自然が新鮮な、驚異の存在として、または恵みを与える存在としてみえてくることを最後の四行が暗示する。

この自然のリズムにしたがって時をすごすという image は、THE VISIT の冒頭の詩でもある。

We sit, strangers, at
a friend's door waiting.
The peach tree blooms we
note, and the night comes

down from the mountain
to wait upon us.

And when we arise
to go the rain falls

upon us. We go
nevertheless. Wrung
by spring. We leave word
we were here for him. (THE VISIT)

これは万葉の自然な世界を連想させる。時間にとらわれず、悠々と自然のままにすごす古代人のおおらかさがある。優雅さがある。平安がある。回復された人間のイメージがある。

自然と一つになること、これこそ neurosis から脱出し、人間回復する方法なのである、と Corman は suggest しているように思われる。彼は静寂の庭園を描く、しかしそこに、言葉では表現されていないが、人間が存在している。庭の静けさと一つになりきっている作者の姿がある。自然の震える生命と一つになっている詩人の心がある。澄んだ青い、高い空を描くとき、詩人とこの空との交驩があるのだ。茶をたてている僧侶は茶そのものであり、静けさそのものであり、永遠そのものであり、恐らく彼に面して坐っている詩人もこれらのものと一つになりきっているのである。

5. Corman の世界と俳句

このように、彼の詩において、人間は自然の中において回復する。人間はいつも自然の中でとらえられており、自然も人間との関連において描かれて

いる。自然と一つになり、自然の脈に呼応して生きるとき、人間は自然なのである。この Cid Corman の哲学の中に芭蕉的なものが深く感じられる。『三冊子』の中で、芭蕉はいわゆる主客合一を教えている。⁶⁾ 対象の中にそれぞれ固有の生命があり、その各々がそれぞれ宇宙の根本生命に通ずるものをもっている。人間も同じで、いま、人がその私意を払い捨て、対象に観入することによって、対象の生命との間に通路が開かれ、それと感合合一しえたとするならば、それはとりもおさず、わが本然の性が輝きでて宇宙の本体と一つになったことにほかならない、ということなのである。⁶⁾ これこそ俳句の精神なのである。ところで次の Corman の言葉 “—I don't distinguish human nature from nature—” を、芭蕉の言葉と比較するとき、両者の世界観の中にどうしても同質なものを感ぜざるを得ない。

対象の中に生き、その生命と合致すべしという芭蕉的なものが、Corman の詩の至るところに発見される。例えば自然をうたった詩はただ単なる自然の描写ではない。前述もしたように、作者がその自然と一つになっている。そこには禅的な要素がある。例えば、緑の野で茶をたてている禅僧の image の中にもあるし、石の庭の静けさと一つになっている詩人の姿の中にもはっきり感じられる。そしてこの禅は言うまでもなく、老荘思想とともに、芭蕉の精神形成に大きな役割を果たしている。⁸⁾

俳句と Corman の自然詩との根本的な類似は自然と人との合一であり、この合一は俳句の根本なのであるが、類似点はテクニクの中にも当然みられる。俳句はその性格上、表現が簡素である。Corman 詩表現は、5 7 5 のシラブルにこそとらわれてはいないが、まったく簡素そのものである。Tadama はいい例である。

the little girl's
 packbag
 home from school

door slides a lit-
 tle to
 let her in

秋元不死男は、俳句は端的に表現される事により味の深さが生じるといふ、端的とは細かい部分のことには顧慮せず、ずばりと中心を掴みとり、焦点をつきつけることである。省略、圧縮、剔快いろいろのやり方もあるが、要するに根元（生命）を把握するための、単一化のあの手この手である、と述

べている。⁹⁾

ところでこの Corman の詩は正にそうである。対象はカメラアイではとらえられていない。アクセントだけがとらえられている。文章上の主語は人ではない。人、つまり少女はかくされている。かくされているからこそ、彼女は意識の中に鮮明にうかびあがる。ほとんど動きがないからこそ、意識の中で、彼女は生き生きと動くのである。人の感情が表現されていないからこそ、それがありありと感じられるのだ。これは俳句の手法に通ずるものである。¹⁰⁾

彼は次のように述べている。

I HOPE my poems need no "explication".

I want them to be transparent ... and freshness should be the reader's, the sayer's, the hearer's. Preferably the second.¹¹⁾

この言葉は W. C. Williams の「すべての芸術は必然的に客観的でなくてはいけない。そこには弁解もなく、説明もなく、ただ表現するのみだ」という詩論を思いださせる。¹²⁾ところで、この Williams の詩論は「松のことは松に習え」という芭蕉の精神をくむものであると解されてる。¹³⁾

ところで次の詩の世界と技法は十分に芭蕉を連想させはしないか。

the telephone keeps ringing

the clouds hardly move (AREAS OF INTEREST)

この二行詩はまったく俳句的である。季節はほとんど動かぬ雲によって夏と暗示される。けだるい暑さ。鳴り続ける電話。芭蕉の「静けさや岩にしみいる蟬の声」との間に類似性を見出すのは誤りだろうか。蟬の鳴くのに対して、電話が鳴っている。岩のかわりに、ほとんど動かぬ雲がある。少なくとも方法上の類似性を否定することができないのではないか。

先に引用したが、次の詩はどうだろうか。

And then the fields will empty

The chaff ashes yield yet a

Little smoke, as if to say

Here they were, the mortals, they

tried. How incredible the

sky is! Our blue our blue eyes. (from KYOTO)

俳句に比較したらかなり長いが、やはり歌われている世界と手法は俳句を連想させる。季節は秋であり、どこまでも青く、高く澄んだ空が描写の中心

である。この詩は其角の「秋の空尾上の杉をはなれたり」的ではないだろうか。¹⁴⁾ 尾上の杉のはるか上の方に、秋の空が高く澄んでいるという状景である。

このことは Corman が其角の作品を読んだということを主張することではない。彼の詩の世界がいかに関句的であるかということをおうとするだけのことなのである。

6. おわりに

しかし Corman は芭蕉の俳句からの影響について次のように述べる。

I suppose there is a natural overlay between some of my poems and the spirit of Basho's haiku. But it is rather incidental and often will confuse issues.¹⁵⁾

さらに禅との関係については、

Zen is again quite accidental... if there's any. I'm not a student of Zen... or Buddhism, in fact, or any other religion as such... and feel negative, on the whole, towards *any* organized religion.¹⁶⁾

それでは、この彼の自然観はどこから生れたのだろうか。明らかにそれはキリスト教的なものではまったくないし、彼が生物学的に属しているユダヤ民族の奉ずる宗教ともかけ離れている。これはヨーロッパ、アメリカのもう一つの伝統を受けつぐものではないか。アメリカに限ってのみ言えば、それはホイットマン的であり、エマソン的であり、ウィリアムズ的であると言えるだろう。このようなものから Corman が受けついだものが、芭蕉的なものとの出会いによって、さらに深められ、もっと明白な形を与えられたのではなかったのか。『奥の細道』を英訳している Corman と芭蕉的俳句の世界との類似を、単なる偶然として見逃がすことはどうしてもできないだろう。

6年前から彼は日本に住み続けているが、静かな京都、礼儀正しい人々、いまのところアメリカほど好戦的でない日本を彼は大いに気に入っている。彼は他国でしか得られない経験を求めて、日本にきたというが、アメリカの俗物主義に絶望したのかもしれない。そして、日本の自然の中に本来の姿の自然を彼なりに再発見したのだろう。

彼は現代米詩壇の中で、いわゆる great poet ではないか、戦後は特に精神的な詩作活動を続けている。若手詩人、John Taggart が僕あての手紙で

he (C. Corman) was at the nexus of the newer movements in American poetry dating back to the early 50's¹⁸⁾ と評している。

彼の主宰している Origin movement のことを言っているのだろうが、これに依ってたった有力詩人たちの数も多い。Donald Allen がその物議をかもした Anthology, *The New American Poetry 1945-1960* で、アメリカの詩の有力な流れを三つにわけ、その一つを Origin movement とし、Charles Olson, R. Duncan, D. Levertov, P. Blackburn, R. Creeley, Paul Carrol, L. Eigner, E. Dorn, J. Williams, J. Oppenheimer 等の作品をあげている。¹⁹⁾さらに Origin 誌は、ビートの大将 Allen Ginsberg の詩をもいち早く紹介したし、beat の詩人等が尊敬する William Carlos Williams のいまは古曲となっている詩論 On Measure をものせている。²⁰⁾

このようにみえてくると、この C. Corman の一つの試みは、決して米詩壇から孤立したものではない。それよりか、この詩壇の一つの傾向を代表しているときえ言いうるかもしれない。ここで、かつて来日し、禅を学んだ Ginsberg や Snyder の動機を思い起すのだが、C. Corman の試みも行きづまったアメリカ・ヨーロッパ社会から脱けだし、人間回復を追求する若手詩人たちの試みに連らなっているのである。

注

- (1) *The Letter of C. Corman dated 24 March 1968.*
- (2) *The Letter of C. Corman dated May Day 1967.*
- (3) *The Letter of C. Corman dated 29 July 1967.*
- (4) *Loc. cit.*
- (5) 小宮、横沢、尾形編、『俳句・俳論』、角川、昭和34年 p. 291.
- (6) *Loc. cit.*
- (7) *The Letter of C. Corman dated 7 March 1968.*
- (8) 小宮、横沢、尾形編、*op. cit.*, p. 218.
- (9) 秋元不死男、『俳句入門』、角川新書、昭和35年 p. 179.
- (10) *Ibid.*, p. 185.
- (11) *The Letter of C. Corman dated 29 July 1967.*
- (12) 小宮、横沢、尾形編、*op. cit.*, p. 320.
- (13) *Loc. cit.*
- (14) *Ibid.*, p. 91.
- (15) *The Letter of C. Corman dated 7 March 1968.*
- (16) *Loc. cit.*
- (17) *The Letter of C. Corman dated 24 March 1968.*
- (18) *The Letter of John Taggart dated 25 Feb. 1967.*
- (19) cf. Donald Allen (ed), *The New American Poetry 1945-1960*, Grove Press, pp. xi ff.
- (20) C. Corman (ed.), *Origin*, April, 1966, p. 10.

An Analysis of the Factors Causing Farmer's Shift Away from Agriculture

Tadayuki SUGIUE

The purpose of this article is to identify the factors causing farmers to leave agriculture and shift to other occupations. A case study has been carried out in an area (Takinoue Machi, Monbetsu County, Hokkaido) where the declining tendency of agricultural population is conspicuous. The general and fundamental factors are found to be: Firstly, the low level of agricultural income, and secondly, the declining number of people willing to work on the farms.

The Legacy of the "Public Assistance Case Work Controversy" and the Remaining Issues (I)

Kyuichi SHIRASAWA

Case work was introduced to Japanese public assistance administration by the American Occupation authorities after World War II, which emphasized people's right to receive public assistance as against the former Japanese administrative principle which was characterized by benevolence.

This article reviews (1) the controversy involving the idea of public assistance service that took place when the governmental policy was shifted toward the one restraining public assistance as the American influence was diluted, (2) the controversy between Professors Yuichi Nakamura and Isamu Kishi concerning the proper place of "case work" in public assistance, and (3) the legacy of the controversies and the problems that have been left for us to explore.

On Nature in Cid Corman's Poems on Japan *in in good time*

Yorifumi YAGUCHI

The first part of this paper is dedicated to the study of nature as it appears in his poems on Japan. He sees nature as calm quiet,

gentle, peaceful, kind and life-giving. In the latter part, nature is compared to that of Basho's Haiku poems and some remarkable resemblances are seen in terms of their techniques of the Haikus' and Zen influences.

Caesar's Revenge

—Its Summary and Julius Caesar's Ghost—

Shozo TAKAHASHI

There have been many dramas of the Julius Caesar's story. An anonymous play, *The Tragedy of Caesar and Pompey or Caesar's Revenge* registered in 1606, is one of them. This play, which seems to originate not in Plutarch but rather in Appian's *Bellum Civilis*, is regarded as an imitation of Malow's and Kyd's traditional way of drama. Moreover, it is influenced by Lucan and Maret-Grévin tradition, which shows the effect by the contrast and projection of one character, Julius Caesar.

Julius Caesar's ghost in *Julius Caesar* and that in this play presents comparatively different aspects. Though these two ghosts both originate in the traditional custom of contemporary tragedy, their thought and action are quite different. Caesar and Caesar's ghost of this play have three points: one, the great contrast shown between his life and the time after his death; two, an avenging ghost of the traditional Senecan way; three, the thought of Hades and Elysium. These draw a definite line between the Caesar's ghost in *Julius Caesar* and the one in *Caesar's Revenge*. And these differences convince us that *Caesar's Revenge* is a rather poor and traditional imitation play of Elizabethan tragedy.

Some Implications of Psycholinguistics for the Teaching of English As a Foreign Language: Relating to Language Acquisition

Kohei FUNATSU

Since psycholinguistics is the joint investigation of language by